

2019年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	筑波大学人文社会科学研究科	助成金額	30万円
氏名	大茂矢由佳 阿曾麻理依		
研究や活動等のテーマ（申請書に記入した内容を記入すること。）			
外国籍住民の「社会的つながり」に関する実証研究 ―よりよい多文化共生施策の立案を目指して―			
助成金の使用実績の概要（日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。）			
<p>【研究背景と目的】</p> <p>多様な文化的背景をもつ人々が共生できるまちづくりは、かつては外国人の集住地域において「多文化共生」というスローガンのもと実施されていた。しかし、今やこうした取り組みは日本全国に波及し、国の重要な政策的課題の一つとしても位置付けられている。こうしたなか、よりよい施策を計画していくために不可欠なのが、これまでの取り組みの成果を客観的に評価する指標である。その指標として頻繁に参照される「Indicators of Integration」（イギリス内務省）のなかでも、特に「社会的つながり」は評価が難しいとされてきた。本研究では、パーソナル・ネットワーク理論をもちいて「社会的つながり」の数値化を試みるとともに、多文化共生社会の成熟度を測る指標としての有用性を検証する。</p> <p>【助成金の使用実績】</p> <p>本助成金は、主として2020年7月から8月にかけて実施したインタビュー調査に使用した。調査フィールドである東海地方S市への出張費、調査先でのモビリティの調達、インタビュー協力者やポルトガル語通訳等への謝礼などが主な使途であった。新型コロナウイルスの状況に鑑み、2回の実施を予定していた現地調査は1回のみとなった。それによる余剰金は、一部を書籍購入に充てたほか、残金は今後の成果論文の投稿料等に役立てる予定である。</p> <p>【成果と今後の展望】</p> <p>移動の自粛によって現地調査が制限されるなかでも、オンラインインタビューを積極的に活用することで、30名のインタビュー協力者を得ることができた。ブラジルにルーツを持つS市市民という共通項がありながらも、インタビュー協力者が形成しているネットワークは実に多様であった。豊かなネットワークを形成している協力者がいた一方で、ブラジルに居住する家族や友人とのネットワークしか有しておらず、地域での居場所を見つけられていない協力者もいた。</p> <p>S市は全国的にみても多文化共生の取り組みに先進的な地域であるが、外国籍住民の「社会的つながり」には依然として課題も多く、行政や地域組織等によるよりきめの細かいサポートが必要である。しかし、ホスト社会がサービスを提供し、外国籍住民がそれを享受するという従来型の取り組みは、「外国籍住民＝負担」というイメージをホスト市民に印象付けることも指摘されている（Omoya, 2020）。外国籍住民の「社会的つながり」に着目した本研究では、地域活動やボランティア等に主体的に参加している者ほど、ネットワークが豊かである傾向がみられた。こうした点から、当事者である外国籍住民を巻き込んだ施策を促進していくことが、ホスト市民と外国籍住民の双方にとっての多文化共生の成功に結びつく可能性が示唆された。</p>			
助成金の使用金額及び使途			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査地への出張費・・・約 60,000 円 ・ 調査地での交通費（レンタカー、タクシー）・・・約 20,000 円 ・ 調査協力団体への謝礼（粗品）・・・約 10,000 円 ・ インタビュー協力者への謝礼（粗品）（30名）・・・30,000 円 ・ ポルトガル語通訳への謝礼・・・30,000 円 ・ 書籍購入・・・約 100,000 円 <p>※ 助成金の残金は、論文投稿料や英文校正費として使用することを予定している。</p>			
助成金を使用した成果に関する発表（インターネットに公表されている場合は URL を記載すること。）			
<p>(1) Yuka Omoya. "Ethnic Diversity Tolerance within Japanese Social Media: A Case Study of #tabunkakyōsei on Twitter", Tsukuba Global Science Week 2020 Digital Poster Session No. 7-1 · Toward Diverse Political Representatives: Gender, Disabled and Ethnic Equality, September-October 2020.</p> <p>(2) 大茂矢由佳「日本語ツイッターにおける「#多文化共生」言説—感情分類とテキストマイニングによる分析」ICR 公開セミナー・シリーズ、オンライン開催、2021年2月。</p> <p>※ このほか、本調査の成果は2021年度提出予定の修士論文（阿曾麻理依著）にまとめる予定である。</p>			